

定年を迎えた。思い出してみると、30年もの長期のローンを組んで家を建てた頃は、若気のいたりりで、将来に対する計画性は全くなく、その日・その年を生きるのに無我夢中であったように思える。

狭さはともかく、庭付きの持家である。1本500円の黒木の苗を5本手に入れて庭の周囲に配置した。植木の手入れは素人ではあるが、水をやることは極力忘れないように心掛けた。通りに面した3本は見事な枝ぶりで成長し、通りすがりの人たちも立ち止まって見とれるほどの枝ぶりである。1本100万円、いや200万円に値するのではないかと外野席からの評価が聞こえてくる。30数年もの間、育ててきた者にとっては金銭には代えがたい。

「育ててきた」。それは、とんでもない傲慢な考えであることに気付いた。この素晴らしい枝ぶりは、自然の恵みによることに間違いはない。朝陽から夕陽まで、太陽の光が十分すぎるほど照らしてくれる場所にある。

残念ながら他の2本の黒木の成長が極端に悪い。朝陽の当たる1本は、なんとか細々と持ちこたえている。全く陽の当たらない1本に虫がついた。駆虫剤をまき、肥料を加えて治療を試みたが病状は悪化した。他の4本に害虫が広がるのを恐れ、長年の情はからむものの、やむなく根元から切り倒し焼却処分とした。

1本500円の黒木も、30数年の歳月とともにそれぞれの運命をたどっていった。十分な水分と太陽の光、わずかばかりの肥料。人の教育に置き換えて、そのむつかしさを痛感させられる、わが家の狭い庭の光景である。

タイにおける代理母出産の新聞報道があった。10数名の代理母での子供。子供を育てるための十分な資金があるからとの弁明があった。肥料（資金）をふんだんに用いるだけで、子供は成長するのであろうか。

アメリカでの「尊厳死」の選択の報道があった。「安楽死」ともとらえることができる。今一度、「生命への畏敬」の念について、深く考えてみたい。「自己決定権」の背後に潜む、「自然」と「時」の重みに感謝しつつ。

最初から、1本100万円の黒木を植え、あくなき快適さを追求することを推奨する金銭崇拝の社会・政治ではあるが、偉大な自然の力を信じ、苦勞しつつも、小さな苗から育てる意味を噛みしめてみたい。南の島の青い海、青い空を背景に。